

## ■ 米・日株高がドル/円を下支えする

とりあえず、来週の米連邦公開市場委員会（FOMC）は「25bpの利下げ+追加利下げの可能性を示唆」といったところか。もちろん、この次第によっては「追加利下げの要なし」となる可能性だって大いにあると言えるだろう。

とまれ、FOMCの材料性が低下したことで市場の主な関心は米主要企業の4-6月期決算に移り、同時に米中交渉の成り行きについても再び目が向けられやすくなっている。折しも、来週30-31日の日程で米通商代表部（USTR）のライトハイザー代表とムニューシン財務長官が中国を訪れ閣僚級の貿易協議が行われると伝わってきた。

例によって中国側は劉鶴副首相が責任者を務めるとされ、この米中メンバーの協議では「永遠に合意の道など開けないのではないかと」も思えてしまうが、ひとまず「協議が再開されることは良いニュース」ということで市場には基本的にリスクオンのムードが漂っている。

何と云っても、米国の株式相場がとにかく強い。ことに大手IT・ハイテク企業の株価の値動きが好調で、昨日（7/24）もフィラデルフィア半導体株指数（SOX指数）は3日続伸で過去最高値を更新している。

一つに、ゴールドマンサックスが今週22日に「半導体メモリーの在庫調整が想定よりも早まる」との見方を示したことが大きかったと考えられ、結果、米株市場でアプライド・マテリアルズやラムリサーチ、マイクロン・テクノロジーなどが大幅高となった。それに連れて、日本株市場でも東京エレクトロンやアドバンテスト、SCREENホールディングスなどが値を飛ばす展開となっており、やはりこれらの半導体関連銘柄や日本電産、ファナック、安川電機などが強いと全体のムードは明るくなり、日経平均株価の上値余地も拡がりやすい。

今週に入って、日経平均株価は25日移動平均線、75日移動平均線、200日移動平均線を次々に上抜く展開となっており、さらに25日線が75日線を下から上に突き抜けるゴールデン・クロスも示現している。加えて、昨年10月高値と今年4月高値を結ぶレジスタンスラインや一目均衡表の週足「雲」上限をも上抜ける展開となっており、当面は今年4月高値=2万2362円を試す展開となる可能性も大いにあると見られる。

もちろん、足下で株価が堅調に推移していることはドル/円の下値を支えることにも一役買っていると見ていいだろう。ただ、目下のドル/円は一目均衡表（日足）の非常に分厚い「雲」に上から押し掛かれる格好となっており、今しばらくはもみ合い色を濃くする可能性が高いと見られる。一応はFOMCの結果に対する反応も見定めたいが、それで一段の下値を探るといった展開にはならないものと個人的には見る。

当面は、対ドルでのユーロの行方がドル/円の値動きにも大きく影響すると見られる。

前回更新分の本欄で「ユーロ/ドルは一目均衡表の週足『雲』下限や62週移動平均線、31週移動平均線という上値の抵抗を受け、中長期的な下落トレンドにあると見られる。よって戦略的には今後も戻り売りが基本」と述べた。そして案の定、先週19日以降のユーロ/ドルは基本的に下げ一辺倒の展開となっている。

むしろ、本日（7/26）のECB理事会を控えて、事前にユーロの買いポジションを外しておきたいとする向きが多かったのかもしれないが、如何せん足下の景況を示す指標結果があまりにも振るわないことも大きいと言えよう。定例理事会後の会見でドラギ総裁が想定以上にハト派寄りのコメントを発する可能性もあり、その点は一つ要注意と言えよう。

ただし、この1ヶ月ほどの間、ECB理事会の開催に向けてユーロ売りが継続したことで、一旦は「出尽くし」となる可能性もあり、そこはドラギ総裁会見の内容との綱引きとなる。場合によってはユーロ/ドルに一旦リバウンドが生じる可能性もあり、そこはチャンスになり得ると見たい。

（7月25日 11:35）